群教セ	G01 － 04
	平 30.269 集
	国語－高

文章に対する考えを広げたり深めたりすることができる生徒の育成

――国語総合におけるマイクロディベートの活用を通して――

特別研修員　引田　遥子

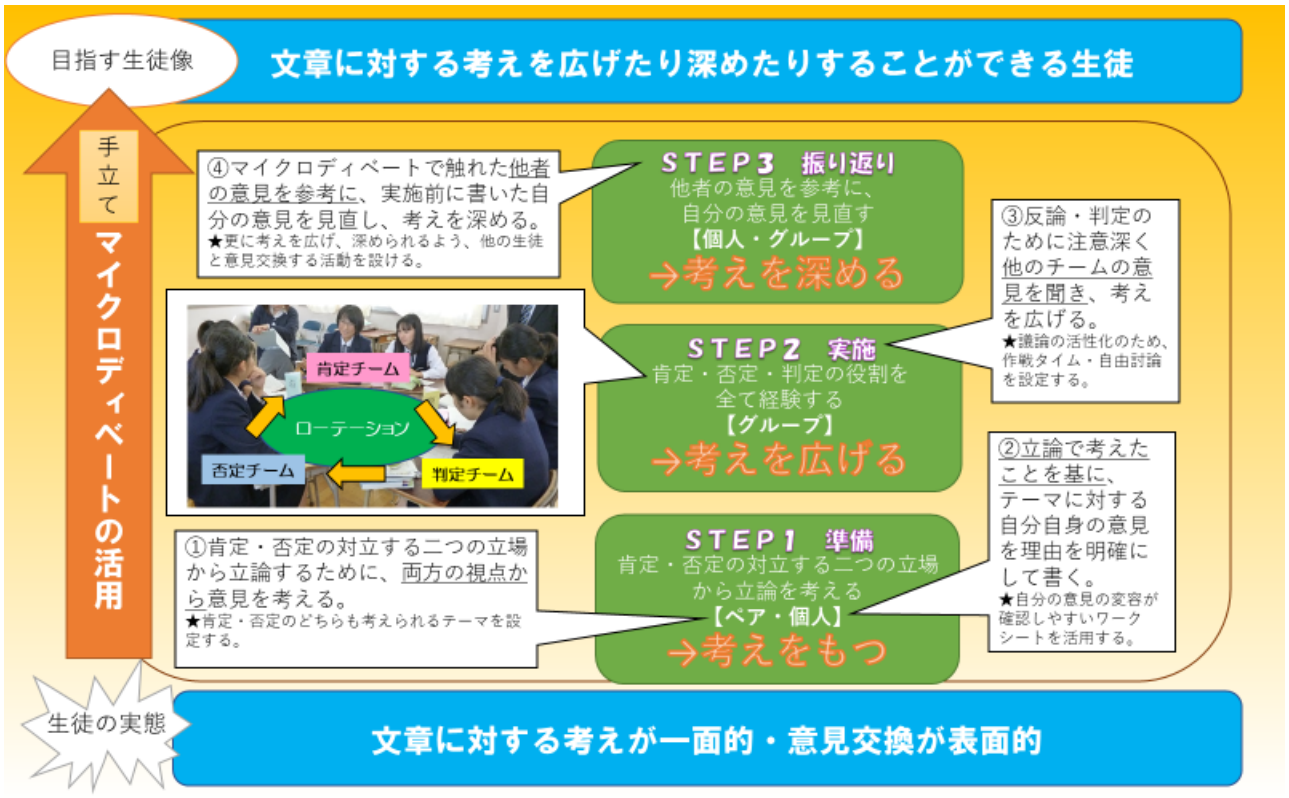
Ⅰ　研究テーマ設定の理由

平成 30 年度県立学校教育指導の重点には、「基礎的・基本的な知識・技能の習得と、思考力・判断力・表現力等の育成のバランスに配慮した指導を行う」とある。また、新学習指導要領第２款の各科目の目標の（２）においては、共通して「他者との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりできるようにする」という文言が掲げられている。このように、国語科においては、他者との交流を通して、思考力・判断力・表現力等を育成することが求められている。

研究協力校（以下、協力校）の生徒は、文章の読解や、読み取ったことに対して自分の意見を述べるという活動には積極的に取り組むが、その内容を見てみると、一面的なものが多い。また、他者との意見交換を行う際にも、ただ表面的に意見を発表し、意見の広がりや深まりがなく終わってしまうことが課題であった。そこで、一つのテーマに対して肯定・否定の立場と判定を全て経験する「マイクロディベート」を用いて意見交換を行うことにより、論理的な思考力が促され、文章に対する見方や考え方を広げることができるのではないかと考えた。その後、他者の意見を参考にしながら自分の意見を更に検討することで、文章に対する見方や考え方を深めることができるのではないかと考え、このテーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

生徒が文章に対する考えを広げたり深めたりすることができるように、以下の手立てを通して授業改善を図ることとした。

手立て　マイクロディベートの活用

単元の内容に関わるテーマを設定し、そのテーマについてマイクロディベートを実施する。なお、マイクロディベートとは、少人数で肯定・否定・判定の三つの役割全てを経験するものである。本研究では、生徒が相談しながら意見を述べることができるよう、二人一チームとした。三チームが一班となり、計六人の班でチームごとに一回ずつ役割をローテーションしていき、計三回のディベートを一単位時間の中で行うものとする。

STEP１　準備　マイクロディベートでは肯定・否定の役割を全ての生徒が経験する。そのため、対立するどちらの立場からも、本文の記述に基づいて、根拠をもって立論を考えなければならない。これにより、視点を変えて文章を読み、様々な視点から意見をもつことができると考える。また、この段階でテーマについて自分の意見を考えさせておき、振り返りの際、自分の意見がどのように変容したか考えやすくする。

STEP２　実施　三チーム全ての肯定・否定の理由を知ることができるため、意見を広げることができる。さらに、肯定・否定の生徒は反論するために、また判定の生徒は判定を正確に行うために、意見を注意深く聞くので、自分の考えとの相違を見付けやすくなると考える。

STEP３　振り返り　実施後は、実施前に書いた自分の意見と他者の意見を振り返らせ、マイクロディベート実施前と実施後では、自分の意見がどのように変容したかを考えさせることで、文章に対する考えを深めることができるようにした。

マイクロディベートのテーマとしては、肯定も否定もできるものを設定し、議論しやすくした。また、教材としては、本文中に肯定・否定それぞれの根拠となり得る記述がある程度見付けやすく、意見に幅をもたせることができる文章として、『伊勢物語』の「筒井筒」を選択した。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　マイクロディベートを学習活動として設定したことで、本文の内容把握の段階から、生徒は目的意識をもって文章を読むことができていた。また、立論を考える際には、本文中の同じ記述から、視点を変えて肯定・否定の根拠とする様子が見られた。物語教材は主人公の視点だけで意見を考えてしまうことが多いが、全ての生徒が他の登場人物の視点にも立ち、様々な考え方で立論をすることができていた。マイクロディベートでは、判定の生徒が肯定・否定の意見を真剣に聞いたり、判定の生徒同士で熱心に話し合ったりし、判定基準に照らし合わせ、生徒なりに理由を考えて判定を下していた。想定した以上に判定の役割が思考力・判断力を養うのに有効であると分かったことは大きな成果であった。以上のように、マイクロディベートが考えを広げるために有効であったと言える。

○　マイクロディベートを終え、肯定・否定の結論自体が変わった生徒は 55%であった。また、「結論は変化していないが、反対意見にも納得するところがあった」「他の人の意見を聞いて、その理由は自分では思い付かなかったものがあった」など、93%の生徒が最初の意見から変容した部分があると書いていた。結論自体が変わった生徒については、「他の人の意見の方が、自分の意見より説得力があった」など、自分の意見を見直し、自分自身で評価していた。以上のように、マイクロディベートは考えを深めるために有効であったと言える。

２　課題

○　役割を変えながら同じ内容のマイクロディベートを三回繰り返すため、同じような意見が出てしまい、反論や自由討論で議論が活発にならない、という場面があった。また、判定に時間が掛かったことから、時間設定に余裕をもたせるべきであった。さらに、判定基準については、抽象的で生徒が判断しにくく、迷う項目があったため、より具体性がある内容に改善する必要がある。

実践例

１　単元名　「伊勢物語　筒井筒」（第１学年・２学期）

２　本単元について

本教材は、協力校の生徒が「児のそら寝」「芥川」「ある人、弓射ることを習ふに」に続き、四番目に学習する古文である。二人の「女」に対しての「男」の心情や行動が明確に述べられているため、内容が理解しやすく、題材も男女の恋愛であるため、生徒は関心をもって取り組むことができる。「男」の人物像を考える材料も多くあり、見方によっては賛否が分かれるため、本文の記述を基に、生徒が様々な意見を考えることができる作品である。以上のことから、他者と意見交換を行い、考えを広げたり深めたりする活動にふさわしい教材であると考える。

以上のことから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

<table>
<tr><td>目標</td><td colspan="2">本文の記述から捉えた「男」の人物像について、マイクロディベートを行うことで作品に対する考えを広げ、振り返りを行うことで考えを深める。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">評価規準</td><td>関心・意欲・態度</td><td>・本文の記述に基づいて作品を読み、理解しようとしている。
・他者との議論を通して、作品に対する考えを広げ、深めようとしている。</td></tr>
<tr><td>読む能力</td><td>・本文の記述に基づいて登場人物の人物像を読み取ることができている。
・他者との議論の中で作品に対する考えを広げ、振り返りを行うことで考えを深めることができている。</td></tr>
<tr><td>言語についての知識・理解・技能</td><td>・助動詞等の用法について理解し、適切に現代語訳している。
・和歌の修辞法について理解している。</td></tr>
<tr><td>過程</td><td>時間</td><td>主な学習活動</td></tr>
<tr><td>課題把握</td><td>第１
～３時</td><td>・マイクロディベートのテーマ「『男』はいい男である」を把握する。
・平安朝の生活や価値観を知る。
・重要古語や助動詞などを手掛かりに、古文を現代語訳する。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">課題追究</td><td>第４時</td><td>・二人の「女」について本文の記述から分かることをまとめる。
・二人の「女」に対する「男」の心情や行動を中心に、「男」がいい男であるかどうかについての意見を考える。</td></tr>
<tr><td>第５時</td><td>・「男」がいい男かどうか、他の班の人が考えた意見を、本文を基にして妥当かどうか、チームで検討する。
・テーマについて、自分自身は肯定か否定か考える。</td></tr>
<tr><td>第６時
（本時）</td><td>・マイクロディベートを行う。
・マイクロディベートで得た他者の意見を基に、振り返りを行って自分の意見を再考し、考えが広がったところを文章で書く。
・マイクロディベート前後でどのように考えが変わったかを発表し合う。</td></tr>
<tr><td>まとめ</td><td>第７時</td><td>・班を編制し直し、他の班ではどのような意見が出たか、それによってどのように自分の考えが変わったかを発表し合う。
・マイクロディベートでは出なかった意見や解釈について教師の提示を受け、自分の考えを深める。</td></tr>
</table>

３　本時及び具体化した手立てについて

本時は全７時間計画の第６時に当たる。生徒は「『男』はいい男である」というテーマでマイクロディベートを行うことを目指して学習活動に取り組んできている。

意見交換によって考えを広げたり深めたりすることできるようにするため、特に工夫をした手立てとしてテーマ設定が挙げられる。今回設定したテーマは「『男』はいい男である」であるが、あえて「いい男」の定義をしないことで様々な意見が出るようにした。また、このテーマで肯定・否定の立論を考えるには、主人公である「男」だけでなく、他の登場人物の視点に立つ必要性が出てくるため、考えを広げやすくできるのではないかと考えた。

その他、次のように手立てを具体化した。

・本文の記述から立論の手掛かりを見付けやすくするワークシートを活用する。

・立論の手掛かりとするため、本文の記述に関連する、平安時代の人々の生活様式や価値観を示す。
・チームで考えた立論について、本文に基づいているか、理由は妥当であるか、という視点で他のチームと検討し合う活動を行い、立論により説得力をもたせるようにする。
・マイクロディベートの前後で自分の考えが変わったかどうか分かりやすくするワークシートを活用する。
・作戦タイムを設定し、反論を本文の根拠に基づいて考えることができるようにする。
・自由討論を設定し、議論を深めることができるようにする。
・マイクロディベート終了後に、自分の考えが変わったかどうかや、その理由を話し合う活動を設定し、更に考えを深められるようにする。

４　授業の実際

(1)　前時まで

生徒は、前時までに「『男』はいい男である」というテーマについて、肯定・否定の理由をそれぞれ三つずつ考え、記述して、その妥当性についてチームで検討している。また、立論を考えた後、個人の活動として、自分自身はテーマに対して肯定か否定かと、その理由を記述している。

(2)　導入　本時のめあての把握と、マイクロディベートの流れの確認

前時に記入した立論を確認させた後、マイクロディベートの目的である「他者の考えを聞いて、考えを広げ、深めること」を明確にし、その後、黒板に掲示した流れと判定基準を確認した。マイクロディベートの流れは以下に示したとおりである。

○マイクロディベートの流れ		
①肯定側立論（30 秒）	②否定側立論（30 秒）	③作戦タイム（120 秒）
④肯定側反論（60 秒）	⑤否定側反論（60 秒）	⑥自由討論（90 秒）
⑦判定・振り返り（60 秒）	⑧まとめ記入（60 秒）	

以上を二人一チームの六人の班で肯定・否定・判定の役割をローテーションし、三回行うこととする。

生徒が視覚的に現在の活動や時間を把握しやすくできるよう、パワーポイントとタイマーを設置した。

(3)　展開　マイクロディベートと振り返りの実施

六人一班でマイクロディベートを行った（次頁図１）。本教材では比較的否定の材料となる部分が多く、肯定側は反論が難しいと予想されたが、生徒たちは様々な視点から根拠をもって反論していた。一例としては、「もとの女が経済的に困窮したという理由で他の女の所に通うようになったのはひどい」という意見に対して、「二人では生活が苦しいので、自分が他の女の所に通うことでこの状況をどうにかしようとしたのではないか」という反論や、「一夫多妻制の時代なので、男は悪いことをしている訳ではない」という、時代背景から考察した意見も見られた。一夫多妻制という視点においては、否定側の意見で「一夫多妻制なのだから、女に平等に愛を注ぐべきではないか。それができていない男はいい男とは言えない」という意見があり、それを聞いた他のチームの生徒からは「なるほど」と納得する様子が見られた。マイクロディベートを三回実施した後、改めてテーマについて考え、自分の考えが変わったかどうかと、その理由を記述する場面では、肯定・否定自体は変わらなかったが、その内容が変わったという生徒が多く見られた（次頁図２）。

５　考察

マイクロディベートという課題を設定したことで、生徒は本時前の活動から目的意識をもって学習に取り組めた。立論を考える場面では、ペアとなった生徒と熱心に相談していた。机間支援した際には、「本文の同じ記述を肯定・否定両方の根拠としてもよいか」という質問が複数の生徒から出るなど、マイクロディベートによって意見交換をする前の準備段階から、視点を変えて意見を考えるということができているという手応えを感じた。また、立論が妥当であるか検討する活動を取り入れたことで、他のチームの客観的な意見を聞くことができ、生徒は自信をもってマイクロディベートに臨んでいた。

本時では、反論の材料を探すために本文を改めて見返し、根拠を明らかにして意見を述べようとしてい

た。自由討論で議論が白熱する場面もあり、生徒は意欲的に活動に取り組んでいたと言える。判定の生徒は肯定・否定双方の意見を聞き、マイクロディベート用ワークシート（図１）内に示した判定基準に照らし合わせて評価をしなければならず、最も思考力・判断力が必要とされる役割であった。そのため時間内に判定ができない、ということが多かった。これは生徒が正確に判定を下そうとしている証拠であり、時間配分や判定基準自体を検討する余地があると考える。また、今回は「勝敗が目的ではない」としたが、勝敗を意識させた方が、生徒の意欲をより引き出せたのではないかと感じた。

マイクロディベート後、29 名中 16 名の生徒が、考えが変化したと回答した。中には「否定には変わりないが、みんなの意見を聞くと、この男はその時代の恋をしていて、今では考えられないこともあったのかなと思った」という意見も見られた。13 名の生徒が、考えが変化しなかったと回答したが、その内容を見てみると、「否定は変わらないが肯定の意見で考えさせられる部分もあった」「否定の意見の方が出やすいと思ったが、肯定の意見もいろいろ知ることができて、考えが深まった」「もとの女が男に対して嫌なそぶりを見せなかったので、男がもとの女を疑ったのは自然なのかもしれない」など、最初に書いた考えと比較すると、考えが深まっている様子が見て取れた（図２）。また、肯定・否定の判断材料になり得ないが、「もとの女が詠んだ和歌は本当にこの男に対してのものだったのか。男の目線でしか書かれていないので、本当のところは分からないのではないだろうか」と深い読みをする生徒もいた。このことからも、この活動が文章に対する考えを広げたり深めたりするのに有効であったことが分かる。

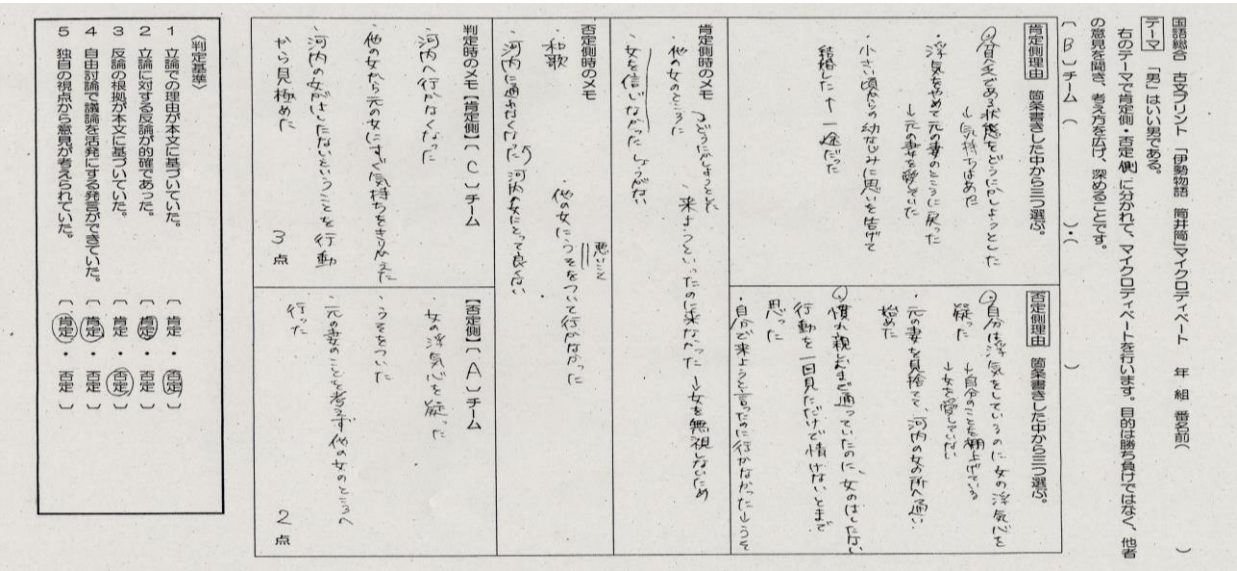


図１　マイクロディベート用ワークシート

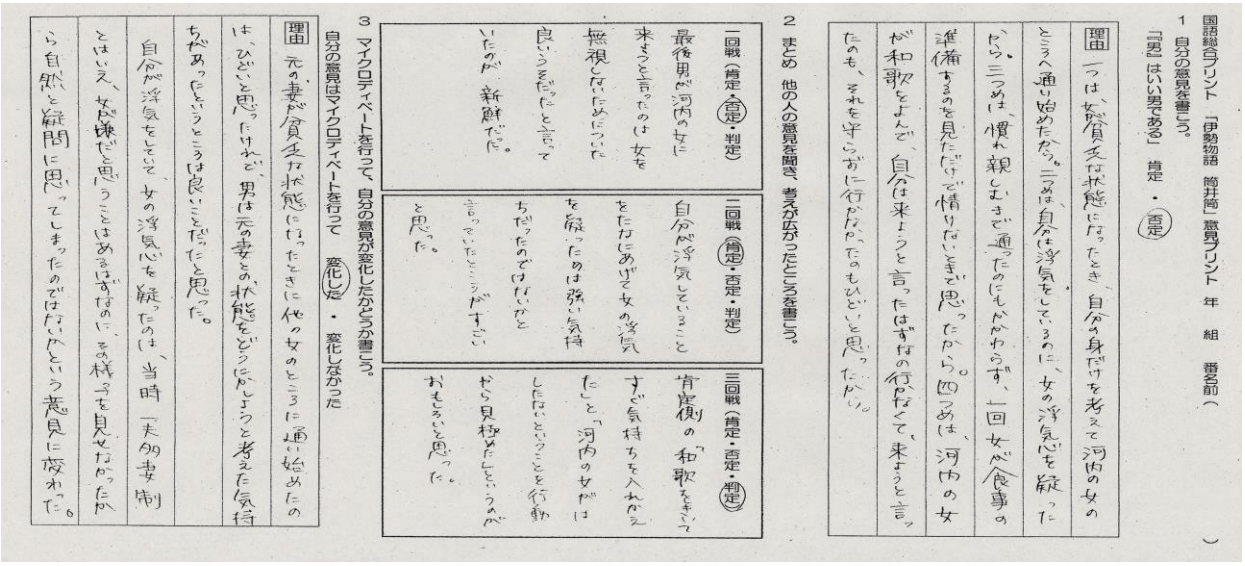


図２　自分の考えを書くワークシート